

## 慶應義塾湘南藤沢キャンパス見学記（中等部・高等部、メディアセンター）

今中 俊久

2018年12月13日（金）、神奈川県藤沢市の慶應義塾湘南藤沢中等部・高等部とメディアセンターを見学させて頂いた。同行者は中学1年学年主任で英語科的場千晃先生。

### メディアセンター

まず湘南藤沢キャンパスのメディアセンターを見学。ご案内・ご説明下さったのは、事務長の関秀行さん。

入口から中に入るとすぐ見えるのがオープンエリア（PC/AV 機器/スキャナー）とクリエイティブスペース。1990年の開設当初はワークステーションを設置するスペースが大きな部分を占めていて、多くの学生が使用していたらしい。現在



は映像や音楽の制作・編集もできる PC・AV 機器が多数置かれており、見学時も多くの学生が利用していた。PC の利用に関しては、他にも貸し出し用のノート PC が多数あった。映像・音楽関係の機器が多くあるのが目を引く。他にも貸し出し用カメラや AV 機器も多い。当時日本ではまだ言葉として馴染みがなかった「メディアセンター」の名称を先んじて使用していたそうです。

入り口を入ってすぐ左側には「ファブスペース」。10台以上ある3Dプリンタはネットワーク上から学生が利用できる（一人1日1回は利用可）。他にもUVプリンタ・レーザーカッター・3Dスキャナーやデジタル刺繍ミシンなどのファブ

リケーション機器が多数あり、いずれも学生が利用できる。機器があるだけでなく、様々な形で学生が利用しやすいように工夫されている点が特徴的。私たちが見学した時もコンサルタントと呼ばれるアルバイト大学生が利用についてわかりやすくレクチャーしてくれた。

ユーザーインターフェイスの工夫は「コンサルタント」の存在の多さに顕著だった。メディアセンター全体で約100名のアルバイト大学生が、それぞれの担当の部門で学生の利用のサポートを行っている。急な休みの時には専任職員がピンチで入るものの、基本的には学生がサポートを担当してい



る。限られた専任職員でメディアセンターを運営するためには、サポートスタッフの大学生の存在が不可欠だと思われる。

2階・3階は主に紙媒体の資料が中心。一般図書・雑誌を始め約35万冊の蔵書がある。そのほとんどが開架式で、学生が手軽に閲覧可能となっている。他のキャンパスと重複する蔵書は、古くなり役割を終えると積極的に入れ替えていく仕組みなので、蔵書数以上に幅広い分野の図書が置かれている。キャレルルームやグループ学習室など学生が利用しやすい工夫も当たり前のようにされている。

地下1階には撮影スタジオ・音響スタジオ・AVホールがある。特に驚いたのは撮影スタジオ。モーションキャプチャシステムやフォースプレートと行った運動力学関連の最新機器がある事。メディアのジャンルが大変幅広い事を実感した。

メディアセンター全体に言えることだが、学びの分野の最先端と言えるものを、先駆的に取り入れようとする姿勢が強く感じられた。「世界に向けて開かれた学びの門」という役割を果たしているメディアセンターは、その存在全体が学びのメディア（媒体）といえる、そう強く感じた。

## **中等部・高等部**

昼食をはさんで午後からは慶應義塾湘南藤沢中等部高等部にお邪魔した。お話ししてくださったのは主事（教頭）の馬場国博先生と事務長の八代誠さん。

慶應義塾湘南藤沢中等部高等部は1992年、創立26年。2019年4月からは新設された横浜初等部からの生徒も受け入れ、中学のクラス数が2クラス増え6クラスとなり、校舎も増設されている。中高一貫教育は徹底され、高校1年は学内では「4年生」と呼ばれる。

### **多様性の中で学ぶ異文化理解**

まず目をひいたのが国際性の豊かさに代表される多様性の広さ。nativeの専任教員は中高各学年に1人は在籍している（クラス担任は2人制）。生徒全体の4分の1が帰国生。国際交流も盛んで、短期留学が英国・韓国・シンガポール・カナダ・米国・オーストラリア・ニュージーランドの7か国（1～3週間）、派遣留学も慶應義塾全体で実施しており、米英の名門校に1年間派遣される（選抜制）。長期留学した生徒は1年間足止めされることが多いが、留学した生徒たちは「名誉の留年」として位置づけられ、評価を受けている。

多様性は国際性だけではない。高校時の入試では全国枠で南関東（神奈川・東京・千葉・埼玉）以外の生徒20名が入学する。つまり、理念としての多様性ではなく、生徒そのものの多様性が制度の上であらかじめ成立していると言える。

### **大学附属併設校のメリットを生かした特色ある授業**

カリキュラムも独特な面が多く感じた。6年（高校3年）次には第2外国語（独・仏・スペイン・中国・朝鮮・基礎英語・発展英語）が週2単位、家庭科や情報科も選択次第で3年間（中学を入れると家庭科は6年間、情報は5年間）を通して履修できる。6年（高校3年）次

では文型選択の生徒も数学Ⅲを履修する。6年生次の総合の時間では、論文実習が週2時間とられ、探求型の授業を実践している。大学附属併設校のメリットを生かして大変特色のある授業を実践していると言える。

設備に関しても大変充実している。特別教室の数も多く（理科6、音楽3、美術3、LL2、AVC2、国社数教室各1）一方で入学者の増加に合わせて行われた校舎の増設(西校舎2018年秋)では、新学習指導要領の施行にあわせて20～30人収容の教室も多く作られている。現代の日本の教育現場に求められているものに正面から取り組んでいると強く感じた。

### 見学者の印象

慶應義塾の中では、湘南藤沢キャンパス自体が進取の気質を強く持つものと位置づけられている（通称 実験キャンパス）こともあって、中等部高等部でも慶應の気品と進取の気概を併せ持つ魅力が至る所に見られた。

例えば、教室見学をさせていただく時に多くの生徒と廊下や教室ですれ違ったが、私たちに自然に挨拶をしてくれた。生徒の様子を見ても伸び伸びした印象を受ける。関大一高・一中も訪問者への生徒の挨拶には定評があると自負しているが、それが当たり前のように実践されており、「さすが慶應」と感じた。

一方で、大学附属併設校にありがちな「保守性」はあまり感じない。新学習指導要領への対応を含めて「学び」に正面から向き合い、教育現場としての答えを出している、そう強く感じた。短い時間での訪問であったのが残念だったが、今回の見学を $\Omega$ 通して「私たちはどのような答えを出すのか」という課題を頂戴した気がした。

見学に際してお世話になったメディアセンターの関秀行さん、中等部高等部の馬場国博先生、八代誠さん、そしてご対応してくださった皆様に改めて感謝します。ありがとうございました。



湘南藤沢キャンパス正面の風景